

機関番号：32673

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530536

研究課題名(和文) 精神障害者のリカバリー支援プログラム(IMR)の実践研究

研究課題名(英文) A study on the Illness Management and Recovery Program: Assisting the recovery process of persons with mental illness.

研究代表者

福島 喜代子(Kiyoko Fukushima)

ルーテル学院大学 総合人間学部 教授

研究者番号：40307997

研究成果の概要(和文)：

本研究では『リカバリーと病気の自己管理プログラム』(以下、IMR)の実践(第一・第二段階)、予備的効果検討(第一・第二段階)、日本版配布資料の開発を行った。第一段階の試行的実践では、IMR参加後は参加前と比べ参加者の地域生活ニーズに有意な減少が認められたが、第二段階ではニーズ・QOLとも有意な変化はなかった。参加者からは前向きなフィードバックが得られ、有害事象の報告もなく、IMRの実施可能性が示唆された。最後にIMR参加者と関係スタッフへの聞き取りを基に、日本の文化と社会システムにより合致したIMR配布資料を開発した。

研究成果の概要(英文)：

In the current study, we conducted two preliminary trials of the IMR (Illness Management and Recovery) Program and its evaluations. Pre- and post-test measures showed significant decreases in needs for community life of participants in the first trial, but demonstrated no significant changes in needs or QOL of participants in the second trial. We finally modified program handouts of which contents would be more suitable for the Japanese culture and social service systems. We received positive feedback from the participants and no adverse event reporting. The current study suggested feasibility of the IMR Program in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	800,000	240,000	1,040,000
平成21年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成22年度	1,400,000	420,000	1,820,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク、EBP(科学的根拠に基づくプログラム)、リカバリー、IMR、対処スキル

1. 研究開始当初の背景

(1) Illness Management and Recovery (「リカバリーと病気の自己管理」、以下「IMR」とする)の必要性

精神障害は、病気と障害の共存がその特徴であり、その回復には、当事者が疾病を理解し、対処方法を身につけることが大切である。しかし、当事者が定める「リカバリー」を目標にすえた、病気や障害の自己管理の支援プログラムはこれまであまり研究されてこなかった。IMRは、個々の利用者が、自ら定めたリカバリー目標に向かうことを支援するために、病気や障害についての知識の提供、対処技能の習得や、ソーシャルサポートの活用等を推進するプログラムである。

これまでに精神障害者への効果が科学的に実証されている複数の支援アプローチ(心理教育的手法、リカバリー志向、動機づけ面接法、認知行動療法等)を総合的に用いることに特徴がある。

(2) 科学的根拠に基づくプログラム(EBP)実践の必要性

米国では、精神障害者に対して科学的根拠の確立したプログラムを提供する必要性が認識され、連邦政府の支援のもと推進されてきている。その中でも、IMRは最後に開発されたプログラムである。

一方、わが国では、科学的根拠に基づくプログラムや、当事者と協働しつつ専門職がリカバリーを支援していく方法がまだ十分に普及しているとはいえず、その実践も限られたものである。

(3) リカバリーに関する研究

リカバリーに関する研究は、わが国でも始められているものの、「概念」研究や「当事者による当事者への支援」研究がそのほとんどであり、専門職による実践に焦点をあてた研究は限られている。

2. 研究の目的

本研究は、以下のことを目的として実施することとした。

(1) 地域の障害者支援施設や病院デイケアでIMRを実践する。

(2) 日本の文化と社会システムに合致した配布資料を作成する。

(3) IMR実践の予備的な効果測定をする。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下のような方法を用いた。

(1) 試行的実践とその効果検討(第一段階実践と予備的效果検討)

- ①日本の社会システムに合わせた配布資料「試行版」の作成
- ②IMR配布資料「試行版」を用いてのIMR実践
- ③予備的效果検討:介入前後に質問紙法による調査を実施。「地域生活ニーズ評価尺度」の4つの下位尺度について検討
- ④IMR試行実践時の参加者のフィードバックを受けて、配布資料を改訂し、「実践研究版」の作成

(2) 実践研究(第二段階実践と予備的效果検討)

- ①実践研究参加施設の募集
- ②実践者への研修の提供
- ③実践研究参加施設ごとに、精神障害者の任意の参加を得てIMRを実践
- ④予備的效果検討:IMRプログラム参加群20名と対照群24名に、質問紙調査を実施。効果測定のための使用尺度は、「地域生活ニーズ評価尺度」および「WHO-QOL26」。得られたデータについて、t検定、 χ^2 二乗検定、二元配置分散分析を実施。
- ⑤実践者および当事者からの、IMR実施上の課題や留意点のフィードバック

(3) 実践者への研修・グループスーパービジョンの提供

- ①IMRプログラムの実践者に対して、事前研修の提供
- ②実践者へのスーパービジョンの提供

(4) 最終版IMR配布資料の作成

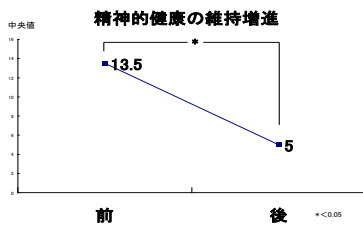
- ①実践研究施設担当者を対象としたフォーカス・グループ・インタビューの実施
- ②日本の文化や社会システムに合致した配布資料の作成

4. 研究成果

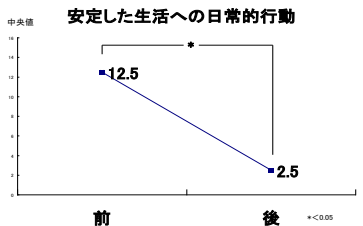
(1) 試行的実践とその効果検討 (第一段階実践と予備的効果検討)

- ①参加施設: 都内作業所3カ所を有する現NPO法人
- ②参加者数: 男性5名、女性4名 (診断名: 統合失調症、感情障害、神経症)
- ③期間とプログラム実践で実施したセッションの回数: 2008年6月～8月まで、全16回
- ④効果検討結果: 介入前と介入後とでは各下位尺度の得点の中央値に有意な差がみられた (ウィルコクソンの符号付順位検定)。

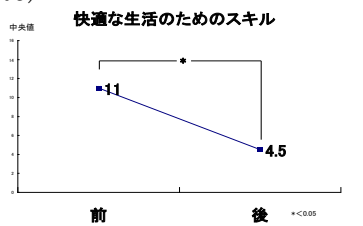
◆「精神的健康の維持増進」(z=-2.25, p<0.05)



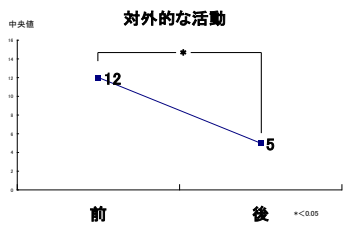
◆「安定した生活への日常的行動」(z=-2.32, p<0.05)



◆「快適な生活のためのスキル」(z=-2.38, p<0.05)



◆「対外的な活動」(z=-2.21, p<0.05)



(2) 実践研究 (第二段階実践と予備的効果検討)

- ①参加施設: 6施設・機関
- ②プログラム参加者数: 6箇所

<内訳>
(種別及び当初参加者と事後調査時参加者)
◆病院デイケア部門 (7名→6名)
◆就労継続支援事業B型事業所 (3名→3名)
◆地域活動支援センターI型 (5名→5名)
◆地域活動支援センターII型 (6名→6名)
◆精神障害者通所授産施設 (3名→△)
◆精神障害者グループホーム (5名→△)
このうち、通所授産施設は、参加者の入院によりプログラムが中断したため、調査期間中に実践が終了しなかった。また、グループホームは、途中で参加者の退所等が相次ぎ、プログラムが継続されなかった。

③期間とプログラム実践で実施したセッションの回数: 各施設で異なる

④効果検討結果
プログラム参加群と対照群の属性

◆性別	男	女	計(名)
参加群:	13	7	20
対照群:	18	6	24

◆平均年齢

参加群:	38.0歳	(SD=12.7)
対照群:	38.2歳	(SD=10.8)

◆過去の入院期間

参加群:	14.0ヶ月	(SD=27.6)
対照群:	32.0ヶ月	(SD=38.1)

◆診断名

	統合失調症	気分障害	その他(名)
参加群:	16	1	3
対照群:	23	1	

◆就労

	就労	アルバイト	作業所	他(名)
参加群:	0	4	13	3
対照群:	2	8	11	3

◆婚姻

	既婚	離婚・死別	未婚(名)
参加群:	0	4	16
対照群:	2	2	20

◆住居

	自宅	GH	入所施設	他(名)
参加群:	19	0	1	0
対照群:	20	1	1	2

参加群と比べ、対照群は、過去の入院期間が有意に長かったが、それ以外の属性等（性別、年齢、婚姻状況、居住場所、就労状況、精神科診断等）については両群に有意な差は認められなかった。

IMRプログラム実施後に、IMRプログラム参加群では地域生活ニーズの減少傾向はみられたものの、地域生活ニーズおよびQOLともに、有意な変化は認められなかった。

プログラムの実施と参加にあたり有害事象は確認されず、参加者からは前向きなフィードバックが報告されていることから、プログラムの実施可能性が示唆された。より科学的な手法を用いたプログラムの効果検証や効果測定に用いる尺度の再検討が今後の課題である。

(3) 実践者への研修・グループスーパービジョンの提供

事前研修には、各施設から2名以上の参加があり、IMRの概要、グループ運営、SSTの進行などについて演習形式もまじえた研修を実施した。

スーパービジョンは、2カ月に1度、計5回実施した。毎回、複数の実践研究施設からの参加があり、それぞれの進捗状況の報告と、IMRを進行する上で生じる運営上の疑問点などを分かち合いが行われた。

研究代表者らは、実践上の課題についての教育的・支持的なスーパービジョンを行った。特に、ルール設定、個々のリカバリー目標の再確認、宿題（チャレンジ課題）の設定などについて課題の認識が共有された。その上で、各実践施設・機関の実践上の留意点について情報交換を行うように促した。

(4) 最終版 IMR 配布資料の作成

①フォーカス・グループ・インタビュー

フォーカス・グループ・インタビューを2回に分けて実施した。参加者は、実践研究協力施設のスタッフである。スタッフは、参加者の意見を集約して、配布資料と運営方法についての意見を述べた。その結果は、改訂版配布資料の作成に反映した。

②改訂版配布資料の作成

配布資料の各テーマの名称は以下のとおりとし、当事者の方が取り組みやすい名称とした。精神障害者リハビリテーション学会監修のツールキットの手引きを活用することを前提にしているため、精神障害者リハビリテーション学会版におけるテーマの名称との対比

表を用意し、配布資料とあわせて提供することとした

テーマ1：リカバリーとは

テーマ2：精神疾患と症状について

テーマ3：ストレス-脆弱性モデル

テーマ4：社会の中で支えの支え、サポートづくり

テーマ5：服薬をうまくする

テーマ6：再発防止計画をたてる

テーマ7：ストレスに対処する

テーマ8：問題と症状への対処

テーマ9：福祉・保健・医療サービスをうまく利用する

配布資料については、専門用語の訳語、質問の構成の改善の提案、書き込み式にしたほうが良い部分などについて指摘があった。

①運営の仕方については、第1テーマへの取り組みに時間がかかるので、そのことをふまえた実践計画をしたほうが良いことが指摘された。

②毎回のセッションで、本来、最も大切である「リカバリー目標」を確認しながらすすめることが、事実上困難になることがあるとの指摘があった。そこで、各テーマの開始時に、個々の「リカバリー目標」を再確認できる欄を設けることとした。

③宿題（チャレンジ課題）について、毎回具体的なチャレンジ課題を設定することについても、困難なときがあると報告された。そこで、配布資料のテーマごとに、宿題（チャレンジ課題）を書き込む欄を設け、かつ、その結果を記入できる欄を合わせて設けた。

④指摘のあった訳語については再検討し、日本の一般の人々に理解されやすい言葉を使用することとした。

⑤例示項目の列挙などの部分は、できる限り、チェック方式ですすめられるような工夫を行った。

⑥テーマ3の「ストレス-脆弱性モデル」で、「何をストレスと感じるか」など、質問の流れから追加したほうが良さそうな質問項目の指摘があり、それらの質問を追加した。

⑦テーマ9「福祉・保健・医療サービスをうまくする」については、米国のサービスの列挙であった部分を、日本の社会・制度にあわせた内容に全面改訂し、障害者自立支援法成立に伴う制度移行をふまえた内容とした。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕（計1件）

福島喜代子・小高真美・鈴木あおい、「IMRプログラムの試行的実践:「リカバリーと病気の自己管理プログラム」の日本における普及をめざして」、精神障害者リハビリテーション学会第16回東京大会、2008年11月23日、一橋大学

〔図書〕（計1件）

『IMR・疾病管理とリカバリー（アメリカ連邦政府EBP実施・普及ツールキットシリーズ5』、アメリカ連邦保健省薬物依存精神保健サービス部（SAMHSA）編、日本精神障害者リハビリテーション学会 監訳、2009年、分担部分；『紹介、実践教材ビデオ』の字幕翻訳及び編集協力、1時間40分

〔その他〕

ホームページ

「リカバリーのコツおさらい支援法（IMR）研究会」

<http://recovery-kotsu-ken.blogdehp.ne.jp/>

IMR配布資料（ルーテル学院大学版）の作成公開（PDF版の無料頒布）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福島喜代子（FUKUSHIMA KIYOKO）

ルーテル学院大学・総合人間学部・教授

研究者番号：40307997

(2) 連携研究者

小高真美（KODAKA MANAMI）

国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所・精神薬理研究部・外来研究員

研究者番号：60329886

(3) 研究協力者

鈴木あおい（SUZUKI AOI）

NHK学園社会福祉士養成課程副教頭